

日本ペインクリニック学会
第6回関西支部学術集会
共催セミナー

日時 2025年9月27日(土) 13:30~14:20

会場 大阪国際交流センター 第1会場(さくら東)

「ペイン科でのSGBとリハビリテーションの
統合的アプローチによる顔面神経麻痺治療」

座長

谷口 彩乃 先生

京都第一赤十字病院 緩和ケア内科
副部長

演者

武富 麻恵 先生

昭和医科大学病院 麻酔科 助教

ペイン科でのSGBとリハビリテーションの 統合的アプローチによる顔面神経麻痺治療

武富 麻恵

昭和医科大学病院 麻酔科 助教

顔面神経麻痺は、運動機能の低下のみならず、表情の変化といった整容的側面からも患者の心理社会的QOLに大きな影響を及ぼす疾患であり、早期かつ多角的な介入が求められる。診療ガイドラインにおいても早期治療の重要性が強調されている¹⁾が、麻酔科・ペインクリニック領域からの関与は依然として限定的であり、顔面神経学会における麻酔科医の割合も年々減少している。こうした背景のもと、当科ではElectroneurography (ENoG) による評価および星状神経節ブロック (stellate ganglion block: SGB) を主軸に、早期から積極的な治療介入を実施している。ENoGは治療計画の決定に不可欠な指標であり、精度の高い測定には専門的技量を要するため、熟練した医師による実施が望まれる。SGBは交感神経遮断を介して患部血流を改善し、神経再生環境を整えるとされており、先行研究でも顔面神経麻痺に対する有効性が報告されている²⁾。また、SGBの早期導入によりENoG値の急激な低下を抑制し得ることも示唆されており³⁾、当科でも発症早期からの介入を継続している。さらに当院では、SGBと並行して顔面リハビリテーションも積極的に導入し、運動指導・鏡視訓練・表情筋マッサージなどを組み合わせることで、後遺症の軽減や社会復帰の促進に一定の成果をあげている。耳鼻咽喉科・形成外科との密な連携のもと、重症度に応じた治療プロトコルを策定し、多職種が連携した診療体制を通じて、質の高い治療を目指している。本発表では、症例データおよび診療動画をもとに、ペインクリニックの視点から、ENoG測定・SGB・リハビリテーションを統合した顔面神経麻痺診療の実際と今後の展望について報告する。